

死は分かつものではなく繋ぐもの

詩篇 90:1 ~ 14

■ 死は繋ぐもの

この世の中において「死」というものは悲しいことなのですが、私達にとっては既に分かっていることでもあります。「召天」という言葉は「召される」＝「呼ばれる」ということです。「召される」時が必ずくるからその人が生きていた事が良く分かります。まさに私達にとっての生死感を確認するのが召天者記念礼拝であり、葬儀なのです。死というのは繋ぐものであり私達の人生をもう一度照らすものなのです。

■ モーセの話

モーセは捨てられた人でした。ユダヤ人を殺してしまえと当時の王ファラオが言ったので赤ん坊だったわが子を母親がこっそりと川に流して助けられた子がモーセでした。ファラオの妻に拾われたモーセは王の息子として育てられたのですが、自分がユダヤ人だと知ってしまいます。ある時、目の前で自分の同胞がエジプトの兵隊に殺されてそうになり、兵隊を殺してしまうのです。追われた彼は荒野に逃げていきます。それから40年、彼は羊飼いで生活していました。モーセが80歳の時に神に召命を受け、再び自分の同胞を助けに行きます。詩篇90編の中には救い出した300万人を引き連れて荒野を行くときになんと言われているか。エジプトの民はモーセによってひかれていく中で文句ばかり言い出します。寒い、暑い、パンがない、腹が減った、生きていけない、まるで私達の人生のようです。一時良くなっても、少し悪いことが起こるとすぐ文句を言う、そして同じ失敗を何度も繰り返してしまうのです。

『あなたは私たちの民を御前に、私たちの秘めごとを御顔の光の中に置かれます。まことに、私たちのすべての日はあなたの激しい怒りの中に沈み行き、私たちは自分の齢をひと息のように終わらせます。私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするとところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちが飛び去るのです。だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく、それゆえ、私たちに自分の目を正しく教えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。帰って来てください。主よ。いつまでこのようなのですか。あなたのしもべらを、あわれんでください。どうか、朝には、あなたの恵みで私達を満ち足らせ、私たちのすべての日に、喜び歌い、楽しむようにしてください。(詩篇90:8~14)』

当時のエジプトの民は荒野でこのようにして自分の死に直面して初めてこれを歌ったといわれます。彼らは荒野で40年回りながら、目の前に約束の地があるのに入れずにそこを迷い続けている中で祈ったのであろうと言われています。

■ 「死」でさえも神の愛

もし私達に死がなく、葛藤がなければ私達は自分の目を正しく教えられることができません。死というものを正しく見つめ、神が与える「死」の本当の意味を知った時、そこにある神の愛を見出す事ができます。私達に向けられている神の愛は、的を外した人生を赦し元に戻し、過去の全ての罪はイエスキリストの十字架によって贖われている。その事を信じる者はみな、地上での旅路を終えた時に永遠のいのちに預かることができるのです。その恵みを「死」を通して知ることができるのです。

■ オットー・フォン・ハプスブルグと日野原重明

オーストリアの最後の皇帝、ラストエンペラーであったオットー・フォン・ハプスブルグ。今でもそこに行けばハプスブルグ家がどれだけ栄華を極めていたかよくわかります。ハンガリーやその他の地域を治めたその彼の話が日野原重明先生の告別式で紹介されました。日野原先生は誰もが知る聖路加病院を建て上げていった方です。そんな彼の告別式でオットーの納骨の儀式での話がありました。納骨堂の門に立った執事に対して門番の声がしました。「その門に立つのは誰か」そう聞かれると執事は彼の偉業や治めた国を答えます「ハンガリーの太閤、クロアチア、トスカナの太閤である」ですが「その者は知らない」という声が聞こえます。再び彼の偉業を伝えるのですが門番は再び「私は知らない」と返してきます。しかし最後に執事が言いました。「彼は主の哀れみを求める一人の人間であり生き抜いたハプスブルグである。」するとその門が開かれたのです。日野原重明先生にも、またオットーにも素晴らしい偉業があります。しかし天の御国で安らぐのにその業は全く関係ないのです。神様が見るのは私達が何をしたかではありません。私達を、ただ愛している、それだけです。その人が自らのことに気づき、「主よ憐れんでください。」と言えることが素晴らしいのです。私達は愛されるので愛することができ、受けるので流すことができるのです。ですが、美しいとわかっていてもそれができるとは限りませんし、正しいとはわかっていてもそれを選べるとは限りません。だからこそ、そこで祈ることができるのです。「主よ私にはできません。どうか私にそれができるように力をください。」そのように祈ることができるのは恵みです。だ

からこそ、あなたの心を見て頂きたいのです。

今もしあなたの人生が終わるとすればそれで良いでしょうか？

「鳥は飛び方を変えることはできない、また動物たちは這い方を、また走り方を変えることはできない。しかし人間は生き方を変えることができる。」日野原先生は、よど号ハイジャック事件を経験し、これからは与えられた「いのち」として生き方を変え、自分のために死んだ人がいるなら自分はそのために生きようと決断しました。聖書ではパウロという人が投獄され、それでも命がけで宣教をした時に医師であったルカは命がけでパウロに付き添い助けました。だから自分もそんなふうに宣教師たちが日本に来て病も恐れずに頑張るなら自分はルカのように彼らを支えよう、そう願ったのです。そして戦争の中でたくさんの方が傷つけられるそんな中で自分は敵でも癒し、助けようとして医療を志したのです。それが彼の生涯でした。

■ History

History (His story) 彼とはイエスキリストです。

日野原先生は、自分の罪のために十字架に架かり、自分の人生を背負い、自分の汚なさをも赦してくれたイエスキリストの人生を生きようと心に決めたのです。歴史とはイエスキリストのストーリーであり、それを私達が引き継ぐことです。そして故人である彼らも命がけで子どもたちを育てた人生の中で正しい道を選ぼうと戦い抜いたのです。正しい道を選ぶばかりではなかったかもしれません。しかし、その失敗をも私達の模範として残していったのです。私達は先達たちが生き抜いた道を私の中に生かしたいと思うのです。「もはや私の内にキリストが生きるのだ」とパウロは言っています。私達はあなたが赦されたように赦し、あなたが愛されたように愛する生き方を選ぶ事ができます。

■ いつくしみ深き

この曲を作ったジョセフ・スクライヴェンは非常に苦難の人でした愛する人を続けて失い、母も不治の病になりました。

彼の目の前にあったのは死と病でした。そして自らも多くの痛みと葛藤を負い精神的にも患っていきます。しかしそのような中で彼は余命わずかな母に送るいつくしみ深きという曲を作りました。そして、友なるイエスはいつくしみ深く、その方に祈るのをやめてはならないとうたったのです。彼の生涯は私たちの目から見れば幸せなものとは言えませんでした。しかし彼の目線はその痛みの中に向かうのではなく神様がその中でも与えてくれたいつくしみに目が向いていたのです。後に彼の作ったいつくしみ深きは日本でも知らない人はいない曲となり、多くの人の人生に変化をもたらす力ある道具として用いられるようになりました。

私達の目線とは誰かと比較して幸せか不幸か、誰かと比べて相対的に見ることぐらいしかできません。しかし神の目線とはそうではないのです。今日、私達は目線を変えることができるのです。今、不足に目が向いていませんか？しかしそれが素晴らしいものへと向かうことを知っていれば私達の道は美しいものへと変えられると信じます。

■ 最後に…

主よ私をあなたの平和の道具としてください
憎しみのある所に愛を置かせてください
悔辱のある所に許しを置かせてください
分裂のある所に相合を置かせてください
偽りのある所に真実を置かせてください
疑いのある所に信頼を置かせてください
絶望のある所に希望を置かせてください
闇のある所にあなたの光を置かせてください
悲しみのある所に喜びを置かせてください
主よ慰められるよりも慰め、理解されるよりも理解し、愛されるよりも愛する事を求めさせてください
なぜならば与えることで人は受け取り、忘られることで人は見出し許すことで人は許され、死ぬことで人は永遠の命に復活するからである。

末期の病にかかった人が毎日病床で祈ったとして、今も語り継がれています。

もし私達が彼のヒストリーを知ることができれば多くの人に良い実を残し、そしてあなたがこの地で召される最後の時に多くの人々が「あなたゆえに今私がいます。」という日が来るはずですよ。

(要約者: 西崎 真由美)

(2021年11月28日)